

追悼 三笠宮崇仁親王殿下

大津 忠彦

Obituary for H. I. H. Prince Takahito Mikasa (1915–2016)

Tadahiko OHTSU

2016年10月27日、三笠宮崇仁親王殿下ご薨逝の訃報に接する事と相成りました。御紀寿を全うされ、恐れながら、いよいよ仙寿の域かと拝察致しておりました。先ず以て「オリエント学者」宮様への哀悼の念を禁じ得ません。

宮様御生誕の1915年は、第一次世界大戦（欧州大戦）の真っ只中。西アジアの暦を遡ると、近現代史では、かの「アラビアのロレンス」(T. E. Lawrence) がパレスティナにおいて好機を伺っていた頃。考古学関連では、ドイツ隊によるメソポタミアのたとえばウルク(Uruk、旧約学に御造詣深い宮様ならば“エルク”)遺跡の発掘調査が大戦で中断、エジプトにあつては、かのカーナーヴォン伯(Earl of G. H. Carnarvon) とカーター(H. Carter) がいよいよ「王家の谷」発掘に乗り出した頃。我が国に在つては、濱田耕作(青陵)が恩師セイイス(A. H. Sayce)より、当時最新の西アジア考古学情報、たとえば、ヴィンクラー(H. Winckler)によるボアズキョイ遺跡(Boğazköy、トルコ)発掘成果を教示されていた頃。紀元前の事跡こそはるかに多様且つ久しい西アジア年表に照らせば今紀1世紀はたしかに瞬時ながら、やはり百年間は慎に隔世の感一入であります。

学者・研究者宮様こそ、我が国において今日に連なる「オリエント学」を御創生なされた先覚であったことは、たとえば「日本オリエント学会」の誕生(1954年6月30日創立総会)におけるその御尽力ぶりをはじめとして、あまりにも周知の事実でありましょう。稿者は常々、我が国における「オリエント学」の歩み・系譜への関心から、その探求の端緒を渉猟するにあたり、宮様がかつて御明示なられた下記事項に遭遇し、これを幾重にも反芻し、ともすればその対象域の時間的・空間的壮大さゆえに、研究の目的と手段とが不分明になりがちな際の志向すべき「オリエント学の定義」として良き指南・覚醒役と心得たものです：

- 「(日本オリエント学会は) ある一つの地域に限って、その地域内に関する限り、歴史や地理の学者はもちろん、人類学、宗教学、言語学、美学、それから法制、経済、社会学、さらに動物学や植物学などの専門家にもはいつて頂いて、今日までに日本人が到達している

あらゆる学術の最高水準を総合した協同研究をしようという学会」

- 「(オリエントとは)「古代オリエント地方」と日本の学者が呼称する地域」
- 「ただし、われわれはその地域の古代のことばかり研究するのではなく、中世や近世のことまで扱い(後略)」(『日本オリエント学会の創立にあたって』『日本オリエント学会月報』Vol. 1 (1955-1958) No. 1, 1-2頁)

学会御創設の翌々年(1956年)、8月16日から10月15日の期間、宮様はセイロン(当時)、イラン、イラクを御訪問。この「オリエント」の地第一歩こそは、「日本西アジア考古学」の本格的開始を告げることとなりました：

- 「1956年、東京大学は江上波夫を団長とするイラク・イラン遺跡調査団を派遣されました。私はこの時、イラク北部のテル・サラサートで発掘の鉄入れ式を行う榮譽を担いました。」(『日本における古代オリエント文明研究史』『世界四大文明フォーラム、2000年8月6日』時の「特別講演」より。なおこの御講演にある「バビロン学会」(1917~1923年)についての言及は、佐藤進氏「バビロン学会と古代学研究所—日本における古代オリエント学研究の黎明—」、『立正大学人文科学研究年報 別冊』10 立正大学人文科学研究所(1996年)共々、当時の様相を辿り得る貴重な記録である。)

この学史を振り返ると、宮様には当時既に期するところが御有になったと、恐縮ながら、稿者には拝察されるのです。それは「日本オリエント学会」誕生四半世紀後の1979年、「中近東文化センター」が創設されたのですが(10月23日竣工披露式典、財団法人設立登記は、いま少しはやく、1975年2月1日)その寄付行為に著された「設立趣意書」には以下の如くあり、これは極めて示唆に富み、「中近東文化センター」こそ、まさに宮様御持論の確かな具現化と想察されるからです：

- 「(第二次世界大戦後)我が国からも数多くの学術調査団が中近東を訪れ、その成果は世界的水準に到達し

つつあります。しかしながら、それは、いわば一握りの学者グループにのみ贈られる賛辞でありまして、全国的にみれば、わが国における中近東研究は欧米諸国に比較してかなりの遅れを認めないわけにはまいりません。」

- 「質・量ともにすぐれた資料を収集し、国際的視野に立って総合的に研究・調査を行なう機関として、三笠宮殿下の御発意に佐藤栄作、石坂泰三、出光佐三が賛同して相共に発起人となり、財団法人中近東文化センターをこのたび創設（後略）」

稿者は幸いにも、この「中近東文化センター」において20余年間研究活動に邁進することが叶いました。研究成果を公開する活動の一環として、展示施設を活用した「企画展」が毎年催されましたが、何か稿者には「中近東文化センター」開館5周年、10周年、15周年という節目仕事の主担当が廻り来て、展示、図録作成、講演会等々に携わり、その折には宮様にも「中近東文化センター総裁」として御意見を賜り、あるいは更に具体的には、原稿御執筆を願ひ申し上げる事一再ではありませんでした。「ワープロ」未普及の頃、直前まで御校閲されたらしい痕の残る原稿を、稿者の研究室へ御自ら御持参下さったものです。御手渡し頂く際、いつも表情には柔和な笑みがありました。

著わされたのは図録等の所収にいまなお拝読できるものばかりではもちろんありません。その他、企画展終了後は撤収されるいわゆる「展示パネル」のみの原稿のうちには、あらためて、恐れながら、宮様の御人柄に接する想いのものが少なからずありました：

- 「(前略) なお一言つけ加えさせていただきますが、本センターの蔵品の大部分は故出光佐三氏(出光興産株式会社店主)のコレクションであり、また本センターが建設できたのも一に同氏の御尽力によるものでありました。年月が経過すると、そのことの記憶もうすれがちになりますので、ここに特記して感謝の意を表したいと思ひます」(パネル原稿「開館5周年を迎えて」より)

この「中近東文化センター開館5周年記念展」時の初御披露目品はニムルド(Nimrud)遺跡(イラク)アッシリア宮殿址出土象牙製品でありましたが、宮様御志向の「質・量ともにすぐれた資料」(前出)蒐集は、爾後も継起しました。例えばイラク政府当局(当時)からは、「宮様の御研究資料として」ハムリン地域遺跡群(イラク)出土資料(おもにハラフ、ウバイド期の土器)多数が「永久貸与」されたのです。これは日本調査隊による1977年から1980年にかけての発掘資料の一部。想起せれば、1979年4月20日、宮様は妃殿下御共々ハムリン地域遺跡群を

御視察なされ、稿者は当時の調査隊員のひとりとして現地であつたのを御迎えし、発掘途中のウバイド期住居址を、御説明申し上げましたが、この4年後にあらためて御縁を頂くとは当時全く意想外でありました。

「中近東文化センター」は、年々歳々、海外(遺跡)調査を活発化しました。現下継続のトルコの遺跡発掘調査は、宮様によるカマン・カレホユック(Kaman-Kalehöyük)遺跡鋤入れ(1985年5月31日)で始まりまして、開館10周年を迎えて後は猶更その研究対象地・分野が拡大しました。なお、この開館10周年を機に「中近東文化センター」は増築工事が執り行われました。一階展示室に新たに設える予定の「年表」制作が難航・懸案になっていたある日、宮様は御手製の大きな中近東年表を御広げになり、長い指示棒を御使いになられながら、研究員全員へ御自ら「中近東史」を、それはそれは丹念に解説なされました。宮様の意気込みをあらためて痛く感じさせられたと、いまなお記憶致します。

宮様は、「中近東文化センター」に各界の賓客を御迎えになり、稿者も接遇の一助をしばしば担わせて頂いたものです。例えば、1995年6月27日、マヌーチェフル・モッタキー(Manūchehr Mottakī)駐日イラン大使(当時)が宮様を表敬訪問されました。一通りの御面談終了後、接遇の任を仰せつかった稿者は、御蔭で、其の頃継続していた「イラン遺跡踏査」に関してイラン当局への協力要請を言上する好機を得たのです。これにより後年2001年8月からの「日本・イラン共同考古学調査」が4か年間継続実現したのです。これは、結果的には、現体制下イランにおける初の外国隊によるイラン遺跡調査となりました。この共同調査に関わる「協定書(MoU)」への署名は、来日中の「イラン文化遺産庁」研究部長ゴルシャン氏(当時)と、中近東文化センター学術局長櫻井清彦先生(当時)に依って、2001年6月2日、「中近東文化センター」にて成されました。同協定書文案作成はギリギリまで難航しましたが、最終的完成は在京イラン大使館でなされ、署名に立ち会って頂いた同大使館のイスマイルニア参事官(当時)を大いに煩わせた由。

この協定書署名当日は、「中近東文化センター」を会場とする「日本西アジア考古学会第6回総会・大会」の第1日目でした。当日、2本の講演会プログラムに先立ち、宮様より「ご挨拶」の御言葉を賜ることができました(写真)。

前後しますが、「中近東文化センター」では「日本オリエント学会第39回大会」が1997年10月25、26日の両日開催されました。大会実行委員会委員は中近東文化センター研究員総勢他、同副委員長は櫻井清彦先生(前出)、そして、大会実行委員会委員長は宮様がその御務めを担われました。



「日本西アジア考古学会第6回総会・大会」における宮様

この大会では、初日午後、ふたつのフォーラム、すなわち「紀元前2千年紀のオリエント世界—交流と変革—」および「過去から未来のイスラーム地域—その広がりと深まり—」が、それぞれセンター内の別会場で同時開催されました。宮様の「中近東文化センター」設立御発意のひとつ「国際的視野に立って総合的に研究・調査を行なう機関」（前出）にかなう企画であったと、今更ながら想起させられます。

宮様の計り知れないとでも申すべき御業績を過誤遺漏なくここに振返ることは、稿者の力量ならびに紙幅の及ばないことはもとよりながらも、古代史・考古学を学ぶ者として、折々に必ずや思い至る御論考が多々あります。それらのうちのひとつは、稿者が御執筆を御願ひ申し上げ、中近東文化センター年報『MECCJ』No. 2 (1993年) 巻頭言として頂いた「年頭偶感」。ここには、文化史・日本思想史学者石田一良氏の『形と心』に拠り、その「示唆を念頭において」の物・事象の観察・理解具合から、「歴史の螺旋」を御呈示なされております。まさに宮様独自の史眼すなわち「歴史的発展」の見方を御表明なされていると思量させられるのです。観点の課題として「シンメトリー」に関する御話もしばしば拝聴させて頂いたものです。

宮様には、もちろん御専門分野の高度に精緻なあまたの論文、著書、翻訳書等のほか、ひろく一般向けの、それこそ啓蒙書というべき御業績もまた顕著です。例えば、1956

(昭和31)年上梓なされた『帝王と墓と民衆』（光文社）は、「難しい専門書では決してない。しかし、専門の学識による裏づけはきわめて厳密になされている（金沢誠氏）」と評され（1956年5月5日付読賣新聞朝刊）、また、「本書は「宮様が書いたということと関係なく立派な本だ」と学界からも絶賛をあげ連続八週全国ベストセラー！」（1956年7月6日付同前紙所収の光文社広告欄）との好評ぶりでありました。ちなみに、その年の他のヒット本は『太陽の季節』（石原慎太郎、新潮社）、『四十八歳の抵抗』（石川達三、新潮社）、『モゴール族探検記』（梅棹忠夫、岩波書店）、『飢える魂』（丹羽文雄、講談社）等々でありました（出版ニュース社）。

稿者は研究分野において宮様と相重なるところが大きかったこともあって、いくつもの宮様による著作・編集物を拝読いたしました。それらのうち、発刊からそれはすでに40年になりますが、宮様御自身が編者となられた『特集 考古学 文明の遺産』（『SCIENTIFIC AMERICAN』日本語版1976年、日本経済新聞社）所収諸論文についての短評にある次の一節に由って、「オリエント学者」と同時に、広い御見識の確かな「歴史家」宮様を、稿者は今以て強く追想させられるのです：

- 「地球上に発生したいくつかの文明は、時代も、様相も、形態も、発展の過程も同一ではない。それぞれの民族は皆同一の精神をその舞台上で示すとは限らない。フランスの大歴史家マルク・ブロックは「自然において、人間はすぐれて最も変化に富む自然ではなかるるか」と言っているが、ここに並べられた諸文明の初期段階をお読みになる時、その多様性に驚かれることであろう」

宮様は我が国における「オリエント学」の緊要を逸速く御提唱され、遙かなる研究の途を敷設、そして御自ら照らし、知の疆域を拓かれました。宮様の御功績ならびに学恩に、唯々甘んじそして邁進してきたのではないだろうかとの想いに到らされるようでもあります。斯学の進展を、揺るぎなく継承すべく、千古不朽の御功績は、向後、幾重にも回顧されるべきことを、あらためて銘肝致します。

御生前の恩徳を偲び、心から哀惜申し上げ、ここに燕詞をもって追悼の辞と致します。

大津 忠彦
筑紫女学園大学文学部アジア文化学科
Tadahiko OHTSU
Department of Asian Studies,
Chikushi Jogakuen University